『御文章』にみる真仮論

徳永大信

『御文章』五帖八十通は、如何にして選定されたのであろうか。これは実如継職の記事によれば、蓮如によって大教団となったことによる蓮如自身の指導によりなされたとある。

そこで第一に選定されたのが現在の五帖目の二十二通が編集された。寺川襄師は『真宗列祖の教学』の著書の中で、前四帖は、門徒の心得に関するものが多く、後の五帖目には、全二十二通は、もっぱら安心に関するもので、他の帖に比べて、短文が多いことを指摘されている。

とくに、五帖目の一帖目一通は『末代無智の章』とよばれているが、この短文の一条のもつ重みが特に注意されることではなかろうか。『御文章』五帖目の全体構造をみてみると二通目に八万の法蔵章、五通目に信心獲得章、八通目に五劫思惟の章、十通目に聖人一流章と続いている。五乗斉入される十方衆生の信心獲得の姿が明かされてくる。寺川師は、この五帖目が、始めに編集されたのではなかろうかといわれている。

そのあと、前四帖が、長短にかかわらず。年代順に広く集められたとしておられる。

かくして『御文章』中心の教化と教団の統率がなされ、この五帖目は、年号はすべてこれをのぞき、門徒へ下附するに最も適格な御文章は一紙法語的な意味を持ったのである。

これにより、五帖八十通選定にあたり、教団を統率する実如の意志が明瞭化され、父蓮如の名のもとに、その子実如の意志を反映したものと言えるであろう。

今、五帖目の中、年号の判明するものは、

第五通の信心獲得章	明応六年	八十三歳
第六通の摂取不捨章	明応六年	八十三歳
第八通の五劫思惟章	明応六年二月二十六日	八十三歳
第九通の当流安心章	明応七年十一月十九日	八十四歳
第十一通の御正忌章	文明六年霜月二十五日	六十歳
第十四通の女身の章	明応七年三月	八十四歳

五帖目には二帖目十三通と十四通と共通する『御文章』が

五帖目、十二通（二帖目十三通文明六年七月三日、六十歳）と五帖目の一番おわりの二十二通目（二帖目十四通、文明六年七月五日、六十歳）とが入っている。

これにより六十歳と八十三、四歳の『御文章』が多いことが知られる。この五帖目十一通にも無信単称が問題とされている。これらの明応年間と共に文明六年の年号の多い諸文をみると、五帖目は、特に、無信単称の問題がかかわって編集される意図であったことは早計であろうか。

真宗中興の志願をもった蓮如は、法然、親鸞のごとく劇的な廻心という事項にはあてはまらないが、若き時より本願寺の血脈の中に生まれ、父存如の指導のもと、多くの聖教を書写し、各地の門徒指導者に下附した。親鸞の『末燈鈔』も書写し、手紙のもつ意義をも知っていた。四十七歳の時、はじめて『御文章』をつくったが、その前年の四十六歳の時、金森の道西の所望により『正信偈大意』をあらわしたが、すでにその時、「至心・信楽願為因」の文など存覚の『六要鈔』をしのぐ解説をしているところもみられる。

のちに『御文章』一帖目一通の正定衆不退の文にも、つながっていく。したがって、『御文章』は、消息として読むにとどまらず、蓮如の著書として読まねばならないのでないであろうか。『教行信証』を書写した蓮如は、『教行信証』の「信巻」より「化巻」にかけて親鸞の己証が展開するが、とくに「信巻」が、『御文章』の製作の基盤ではなかろうかと思われる。そこでは、信心獲得ということに指点がおかれている「信巻」では、難信と獲信が問題となっている。

蓮如教学の特質は、親鸞の『教行信証』全体より、信心為本の宗義を導き、雑行を棄てて本願に帰すことを、「雑行を捨てて、後生たすけたまへと弥陀をたのめ」と明言した。

蓮如の教学は『御文章』が中心であり、そのうえでの聞書等の法語類を参照しなければならない。

親鸞教学を真に伝承されていることが『御文章』の上に痛感されてくる。『教行信証』を信心為本ということでおさえてある。特に『信巻』の別序を最要とし把握されている。『信巻』に「願成就一実円満之真教真宗是也」とあり、『御文章』二帖目の三通目には、

「されば先達よりうけたまわりつたえしがごとく、もろもろの雑行をすてて、専修専念一向一心に弥陀に帰命するをもって、本願を信楽するを体とす」

といわれてある。

また、『御文章』二帖目三通には、

「しかれば祖師聖人御相伝一流の肝要は、ただ信心ひとつにかぎれり」

引き続き、同、二帖目三通には、

「これをしらざるをもって他門とし、これをしれるをもっ

て真宗のしるしとす」
としるされている。
これらの文は、『改邪鈔』第十五条の文をそのまま受けてはいるが、覚如の教示を受けつつも、端的に親鸞の信心為本の宗義を明確化したのは蓮如の発揮によると言わねばならぬ。
蓮如は特に五帖目の「末代無智章」「信心獲得章」等の『御文章』の上に願名を用いるのは、第十八願の願名のみである。『信巻』にも問題となっている不如実修行の称名が、『御文章』の上でも、無信単行の口称念仏のことがとりあげられてくる。
それはそのまま、蓮如の親鸞教学の受容の姿であり、同時に、浄土異流念仏義に対する真仮批判であったのである。
当時の教界は、鎮西流の無信単行の口称念仏が流行していた時代であった。鎮西の念仏義は、往生の正業をつのる念仏であった。
『御文章』一帖目四通には、
「信心治定してのちには、自身の往生極楽のためとこころえて念仏もうしさうらうべきか」
と問題を提起している。「雑行を捨てて後生助けたまへと弥陀をたのめ」とは、『教行信証』を通して言えば、『雑行を捨てて』とは、『化身土巻』の仮の姿であり、『後生たすけたまえ』とは、真実五巻の真の姿である。ここに『御文章』にみる真仮論の姿が見られる。とくに「たすけたまえとたのむ」姿は、『教行信証』信巻に明かす「信楽」の論理である。
特に蓮如は、善導の六字釈を引用し『教行信証』行巻の名号釈を受けて、弥陀に帰依する信心は、あくまでも、如来選択の願心より発起したものであり、招換の勅命であると釈される。『御文章』四帖目第九通目には、
「このゆへは、弥陀如来のおほせられけるようは、末代の凡夫、罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくうべしとおほせられたり」
と「行巻」の帰命釈にもとづいてあらわされている。「雑行をすてて後生助けたまへと弥陀をたのめ」とは、『化身土巻』に明かす、要真二門、さらに聖道の教をさしたものであり、これは、あくまでも、真実に帰入する方便（仮）の行として廃捨すべきことをあらわしているのである。
特に浄土宗の称名義を問題とし、如実修行の称名義とは何かを明かすために、信心為本の宗義を明確にせざるをえなかったのである。
覚如、存覚によってすでに明かされたごとく、信心正因の宗義は、平生業成にして不来迎の姿が蓮如にとっては、信心獲得の姿であるとした。これが蓮如によって伝統開顕せられ

たのである。

因みに『御一代記聞書』の初めに、あらわされているのは次の条でこの聞書が始まるのはその編集の意図とは無関係ではないのではないかと思われる。

「自力の念仏といふは、念仏おほくもうして、仏にまいらせ、このまうしたる功徳にて、仏のたすけ給はんずるやうにおもふて、となふるなり」（御一代記聞書、第一条）

と書き出されてあることにも教判の真仮を論ずる上で注目すべきであろう。

『御文章』二帖目十五通には、

「これすなはち法然聖人のすすめ給うところの義は、一途なりといへども、あるひは聖道門にてありし人々の聖人へまいりて、浄土の法門を聴聞し給ふに、うつくしく、其理耳にとどまらざるによりて、我本宗のこころをいまだすてやらずして、かへりてそれを浄土宗に、ひきいれんとせしによりて、其不同これあり」

と当時の実態を歎かれ、また、『御文章』一帖目の第十五通には、

「されば、自余の浄土宗は、もろもろの雑行をゆるす、わが聖人は雑行をえらびたまふ、このゆへに真実報土の往生をとぐるなり、このいはれあるがゆへに、別して真の字をいれたまふなり」

と真仮の分際を論じてある。

『御文章』一帖目四通には、問答形式で、

「信心決定してのちには、自身の往生極楽のためとこころえて念仏もうしそうろうべきか、また、仏恩報謝のためとこころうべきか、いまだそのこころをえずそうろう」

と問うたのに対し、

「一念の信心発得已後の念仏をば、自身往生の業とはおもうべからず、ただひとえに、仏恩報謝のためとこころえらるべきものなり」

と答えてある。蓮如は、鎮西にまぎれる口称づのりの者に対しては、厳しい態度でのぞまれる。

この無信単称の異義に関する『御文章』は、文明三年より、文明七年の吉崎時代であった。

『御文章』三帖目二通には、

「されば世間に沙汰するところの念仏というは、ただくちにだにも南無阿弥陀仏ととなふればだすかるようにみな人おもえり、それはおぼつかなきことなり」

とあり、三帖目三通には、

「ただこえにいだして念仏ばかり称ふるひとは、おほやうなり、それは極楽に往生せず、この念仏のいはれをよくしりたる人こそ、ほとけにはなるべけれ」

とか、三帖目、四通、五通他あるいは五帖目第十一通等にも

多くとりあげられている。

このように、五帖の始終を通して『御文章』が、一帖目一通目にはじまる「一流の安心の次第」として他流との相違を強調して書かれていることがわかる。

『御文章』五帖目の第二十二通は、出雲路修師は、とりたてて言うべきことのない一通にもみえるが、

「されば南無阿弥陀仏ととなうるこころはいかんぞなれば、阿弥陀如来の御たすけありつるありがたさ、とうとさよとおもいて、それをよろこびもうすこころなりとおもうべきものなり」

で最後がしめくくられている。一帖目、一通目には、

「信心決定の上には仏恩報尽のために、念仏まうすこころは、おほきに各別なり、かるるかゆえに身のをきどころもなくて、をどるほどにおもうあいだ、よろこびは身にもうれしさがあまりぬるといへるこころなり」

とあり、これは、たがいに密接に関連しあって『御文章』の構成がなされていることを知ることが大事だと指摘されている。

五帖目一通の『未代無智章』のもつ意義の重さは『御文章』の全体を一貫せるものである。出雲路師は、五帖の『御文章』は、全集をめざしたものではなく、選集をめざしたものであり、ある問題意識をもって選択し、編集してあると。ここにいう問題意識とは、私は、「在家止住」ということではないかと思う。それは『御文章』五帖目の全体構造が、五乗斉入を中心としていることからも知られるからである。また前四帖にもこのことは通じ、特に、その『御文章』の代表的な一帖目第三通、『猟、すなどりの章』によっても明快である。

『御文章』によって伝えようとしたことは何か。時の順序を配列しながら、内容的には、時の経過を示すことではなく、「在家止住」の凡夫は、時や場所に添うた帖外『御文章』の中より選集したものだけが、しかも、門徒に普遍的な問題となる「十方衆生」に選集されたものである。

〈キーワード〉御文章、五帖目、信心

（九州竜谷短期大学教授）

掲載されなかった諸氏の発表題目(5)

ビィハーラ構想とその実際
—仏教とターミナルケアの間—　田宮　仁（佛教大学）

いのちと生命　西村惠信（花園大学教授）

遺伝子治療と仏教の生命観　田代俊孝（同朋大学助教授）